

巻 頭 言



100 年への架け橋 ―創造する学会誌の使命 Bridging to the centennial: The mission of a creative scientific journal

日本補綴歯科学会編集委員会
委員長 前川賢治
Kenji Maekawa DDS, PhD

このたび公益社団法人日本補綴歯科学会編集委員会委員長を拝命し、日本補綴歯科学会誌の編集業務を担わせていただくこととなりました。1935年に日本補綴歯科学会々誌として第1巻が発刊されて以来、本誌は実に90年を超える歴史を刻みながら、我が国の補綴歯科学の発展に多大な貢献を果たしてまいりました。この長大な歴史に思いを馳せるとき、諸先輩方が積み上げてこられた知と臨床の営為の重みを痛感し、身の引き締まる思いでいっぱいです。これまで学会誌の基盤を築き、時代の要請に応えつつ発展させてこられた歴代編集委員長ならびに委員各位のご尽力に、心からの敬意と深甚なる感謝を捧げたいと思います。

我々編集委員会が担うべき使命は、単なる論文掲載にとどまりません。補綴歯科の学術的成果を確実に記録し、学会員の研究・教育・臨床の活力を引き出すとともに、将来の学術史の礎を築くことにあります。現在、大久保力廣理事長より本誌のボリューム拡充について正式なご要望をいただいております。これを受け、編集委員会では新たな掲載企画を多角的に検討中です。過去に好評を博した誌上ディベートや座談会を現代的視点でアップデートするだけでなく、学際的連携や最新技術を背景とした新しい論点を取り入れるべく、複数の企画案を鋭意練り上げています。

さらに、学会創立100周年を視野に入れるとき、本誌は単なる学術情報誌にとどまらず、学会史を後世に伝える貴重なアーカイブとしての役割を担うべきだと考えます。これまで本会を牽引してこられた先達の貴重な経験や思想を直接うかがい、その歩みを記録として残す特別企画や、過去の貴重資料の掘り起こしも構想しています。未来の会員が学会の変遷を一望できる「学会史のための誌面」を整備することは、私たちに課せられた歴史的使命の一つといえましょう。

一方で、一般投稿の減少は看過できない課題です。国際誌である Journal of Prosthodontic Research (JPR) との役割分担を明確にし、本誌では特に臨床現場に直結する症例報告や技術紹介など、臨床論文の掲載を一層推進してまいります。学術大会や支部大会の発表演題に対して編集委員が直接投稿依頼を行う体制を構築し、若手研究者や臨床家が積極的に執筆しやすい環境を整える予定です。これにより、現場で培われた知見を学会全体の財産として共有できる場をさらに広げたいと考えています。また、会員諸氏からの自由な企画やコラムなどの企画に関するご意見等も大いに歓迎いたします。誌面は学会員全体の創造力と熱意によってこそ豊かになると考えています。

近年、生成AIをはじめとする情報技術は教育・研究・臨床の在り方を大きく変革しつつあります。AIを活用した文献整理やデータ解析、教育コンテンツ作成などは、研究の効率化と知の共有を飛躍的に促進する可能性を秘めています。しかし同時に、研究や論文作成においてAIをどこまで活用すべきかという指針はいまだ明確ではありません。学術的信頼性を担保しつつ、倫理性を確保するためには、本会としての統一の見解やガイドライ

ンの策定が求められるでしょう。今後、学術委員会や JPR 編集委員会など関連する委員会とも連携し、国内外の動向を注視しながら、学術界をリードする議論を深めてまいりたいと考えています。

編集委員会は、これらの課題と展望を胸に、誌面の充実と学術的価値の向上を両立させ、本誌が会員にとって魅力的かつ信頼される学術媒体であり続けるとともに、将来の学会史を刻む貴重な記録としての使命を果たすべく、全力を尽くしてまいります。補綴歯科学が社会に果たす役割は、咀嚼・発音・審美といった口腔機能の維持向上にとどまらず、全身の健康や生活の質の向上にも直結しています。その使命を確実に支えるため、本誌は今後も確かな学術情報と時代を映す企画を通じて、会員各位の研究・臨床・教育活動を力強く後押ししていきたいと考えています。

学会員の皆様一人ひとりのご協力とご提案が、次の 100 年へ向けて本誌をさらに飛躍させる原動力です。どうか本誌とともに育て、未来の補綴歯科学を切り拓くパートナーとして、引き続き温かいご支援を賜りますようお願い申し上げます。